国語部会

県研究主題 生徒一人ひとりの言語活動を充実させ、「伝え合う力」の育成を図る学習指導と評価の工夫・改善

提案１　　提案者　大西　真由美（中地区）

＜研究主題＞ 「古典に親しむ態度を育てるための授業工夫」

１　提案内容

中学校の〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕は、小学校との系統を意識して「伝統的な言語文化に親しみ、継承・発展させる態度を育てること」や、「言語感覚を豊かにし、実際の言語活動において有機的に働くような能力を育てること」に重点を置いている。しかし、実際の指導は、現代語訳や音読・暗唱をさせる活動や、定期考査のことを考えて、古語の意味や文語の決まりを教えることに中心を置きがちになってしまっている。そこで、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」及び「読むこと」の指導を通して、生徒自身が古人の姿に共感したり、現代を生きる自分たちの姿と照らし合わせ、古人と自分たちの間に通い合うものを感じたりするような言語活動の充実を考えていかなければならないと考えた。古典と「話すこと・聞くこと」、「書くこと」及び「読むこと」等の各領域の指導とを関連させた言語活動を取り入れることは、「古典に親しむ態度を育てる力」を育てることに有効であることを、実践を通して明らかにしていきたい。

（１）　第１学年で実施した授業

①　古典の導入としての「古典のノート作り」

②　音読、暗唱、現代語訳や古典について解説した文章を取り上げる

③　「話すこと・聞くこと」「書くこと」の指導を通した「読み」の深まり

（２）　第２学年で実施した授業

①　古典作品の音読、群読、表現劇

②　登場人物の人柄や性格についてフリップボードを作成し、発表する活動

（３）　成果

・　各生徒が様々な見方や考え方をもてたことをワークシートから見取ることができた。

・　表現劇を通して、登場人物の行動がもつ意味や思いを、自分につなげてより深く考えることができた。

・　フリップボードを用いた発表により、その人物の思いを深く知ることができ、自分自身の生き方を考えるきっかけとなった。

（４）　課題

・　グループの話し合いでは、満足するような伝え合いができなかった。

・　フリップボードの記載は、時間がかかってしまい、十分に練られた状態で発表にこぎつけることができなかった。

・　内容を理解すること、その内容を表現していくということで、やや内容が多すぎた。

・　学習の見通しをもたせるためにも、生徒に単元計画を示しておくなど、学習のねらいを明確にする必要性を感じた。

２　協議内容

Ｑ：生徒が日々の生活で古典を学ぶ必要性を感じるために、どのような工夫をしているか。

Ａ：「昔の様子からことわざができた」など、今、自分たちがあるのは昔からの流れだということを感じさせる。「必要」ではなく、「身近」だと感じさせるようにしている。

Ｑ：様々な視点から出てきた生徒の意見を、どう価値づけるか。

Ａ：当時の武士の状況など、教員が軌道修正していく必要がある。

Ｑ：評価のＡとＢの違いは何か。

Ａ：Ａは具体性があり、自分に引き寄せて考えられている。

Ｑ：ノート作りの詳細を教えてほしい。

Ａ：最初に同じノートを与え、書き方を説明する。ノートコンテストを行う、誰のノートがなぜ良いのかを付箋に記入し、貼り付けるという機会を設けている。読まれて恥ずかしくないものを作るという雰囲気作りにもなっている。

Ｑ：フリップボードの交流、スピーチの仕方を教えてほしい。

Ａ：隣の生徒と交流させる。隣の会話が聞こえることで、その発想を参考にする生徒もいた。スピーチは、文章を書いて、読んでもいいということにした。

Ｑ：教員同士の引き継ぎはどうしているか。

Ａ：いつ異動になってもいいように、学習指導要領の付けたい力は押さえる。また、単元評価シートを各単元で作り、ファイリングしている。昨年はこれをねらってこう見取ったというように、指導者が代わっても見ることができる。

Ｑ：支援を要する生徒への個々への支援はどうしているか。

Ａ：授業中に支援を必要とする生徒に付きっきりだと、その生徒のプライドを傷つけることもあるので、机間指導をしながら、良かった意見を大きな声で言い、ヒントを出すようにしている。また、振り返り表を書かせ、適宜回収し、見取っている。

３　まとめ

（１）　本提案と現行の学習指導要領との関連

小学校との連携、中学校３年間を見通した計画になっている。本提案では、音読を積極的に取り入れていたが、古典の世界に触れるためには必要な取組だと言える。また、人柄や性格をフリップボードにまとめるという活動は、古典に表れたものの見方・考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像することにつながると言える。３年間を通して、古典に親しむという、学習指導要領に裏付けられた提案である。小学校から系統的に指導していくという学びのつながりを意識しながら、今後につなげてもらいたい。

（２）　「伝統的な言語文化」に関わる新学習指導要領での変更点

大きな変更点はないが、中学校の各学年の（ア）は、「親しむ」に統一されている。また、中２年（イ）では、古典の原文に加え、現代語訳を生かすことが強調されている。

提案２　　提案者　筧　恵（川崎地区）

＜研究主題＞
社会生活に生きる言語活動能力を高め合う国語力の育成
―　言語活動の充実　―

１　提案内容

通信手段として手紙を書く機会は少なくなってきている。しかし、社会生活全般で見た場合、手書きの手紙で相手に気持ちを伝えることは大変重要なことであると考える。本校では、１年次に、さまざまな通信手段とその特徴を学習し、実際に暑中見舞いや年賀状を送り合う活動を行った。２年次では、職場体験でお世話になった事業所へ、気持ちのこもった文章を書くことを目標とした。

（１）　授業実践について

単元名・教材名

職場体験でお世話になった人に手紙を書く
「気持ちを込めて書こう」（光村図書『国語２』）

①　単元目標

材料を集めながら自分の考えをまとめ、相手を意識した文章にする。

②　指導事項

ア　課題設定や取材

社会生活の中から課題を決め、多様な方法で材料を集めながら自分の考えをまとめること。

イ　構成

自分の立場及び伝えたい事実や事柄を明確にして、文章の構成を工夫すること。

ウ　記述

事実や事柄、意見や心情が相手に効果的に伝わるように、説明や具体例を加えたり、描写を工夫したりして書くこと。

エ　推敲

書いた文章を読み返し、語句や文の使い方、段落相互の関係などに注意して、読みやすくわかりやすい文章にすること。

（２）　成果と課題

職場体験を終えてすぐに設定できたこともあり、印象に残ったことや具体的なエピソードなどを、すらすらと書き始めることのできた生徒が多かった。形式的なお礼の手紙ではなく、相手を考えながら書くことで、思いも深まったようである。この学習を通して、気持ちを本当に伝えたいときには、楷書の丁寧な文字、敬語できちんとまとめられた言葉遣いが必要だと感じることができた。また、手紙にはきちんとした形式があり、便箋の折り方や封筒の書き方にもマナーがあるというのは、つまるところ日本人の気配りの文化だということを体感することができた。今後の生活の中でも、どの通信手段を取るのが適切かを自分で判断し、手紙を選んだ際には、心のこもった、相手に伝わる文章を書くことを心掛けてほしい。

２　協議内容

協議の柱　「生徒の学習意欲を高める指導の工夫や仕掛け」

Ｑ：「推敲」をペアで行わせる際に、気を付けるべきことやポイントを教えてほしい。

Ａ：問題点は、ペアのどちらかが書いていないということが起こりうること。しかし、授業の中でそういったことはなかった。ポイントは、誤字・脱字・相手に失礼のないように。感じたこと、思ったことが文に入っているか指摘し合う。ペアでお互いに確認した。

Ｑ：推敲する能力が身についていない生徒がいる中での相互評価はどのように行うか。

Ａ：ペアワークで、相手の下書きの紙に自分の考えを書くことをためらう。特に自分より出来そうな相手の場合に見られたので、貼ったり剥がしたりできる、付箋にすると良かった。自分の考えに悩んだときにすぐ剥がせるとハードルも下げられる。

Ｑ：小学校での手紙を書く経験をどう見取ったか。また、職場体験はお礼状があってのプログラムなのか。それとも偶然よい教材があっからなのか。

Ａ：中学１年生で暑中見舞いなどを書写で学んだ。小学校の先生に手紙を書く活動を考えたが、気心が知れていうので甘えが出てしまうのではと考えた。職場体験でお世話になる大人の方が良いと考えた。

３　指導・助言

生徒にとって、日常生活の中で手紙を書くことはどれだけ身近なものなのか。電子メールやＳＮＳでのやり取りで、絵が文字の代わりをしている現状がある中で、きちんと書くという知識や能力をどのように身に付けていくか考えられているかが重要。しかし、中学校では出身小学校によって学習進度にばらつきがあり、既習事項の確認を授業の中で行っているので、どうしても復習中心になってしまうことが多い。今後は、生徒が小学校でどこまで学んだのか、国語科を中心として情報共有していくことが必要になるのではないだろうか。

協議の柱に即した協議

Ａ　身に付いた力が何に役立つかはっきりしている。

Ｂ　目標・単元の流れを生徒が見通せる。

Ｃ　「挑戦したい」と思える課題に取り組ませる。

Ｄ　三年間の系統立った指導で人間性を育てる。

Ｅ　対話させる場面を意図的に作り、深める。

Ｆ　目標を明確にし、見本と流れを示す。

Ｇ　他グループと同様、目標と流れを明確にする。

４　まとめ

これからの教育を考えたとき、新学習指導要領を子どもたちの視点で読んでいく意識が必要となる。これまで培われてきた実践が若手へ引き継ぐことができるのか、ベテラン教員の不安もある。教員人口は若手とベテラン教員が多く、中堅教員のミドルリーダーとしての役割が今後益々重要となってくるのはもちろんだが、たとえ中堅教員を介さずとも、数々の実践をどれだけ引き継ぐことができるかが課題となる。実践の成果は学校や地域の財産とし、若手教員に残していかなければならない。